

北日本漁業経済学会 ニ 丑 一 及 乙 多 一

第44回 北海道釧路市大会報告

2015年11月17日(火)、18日(水)の両日にわたり、北海道釧路市・釧路市観光国際交流センター・大ホール及び3階研修室において、第44回北日本漁業経済学会大会が開催されました。

今大会では「国際情勢下における道東漁業の現状と政策課題」と題してシンポジウムを、また「道東経済へ影響を及ぼす主要水産資源の動向」と題してミニシンポジウムを企画し、全体で130余名の参加者を得て、下記の通り、シンポジウム、ミニシンポジウム、一般報告、総会および懇親会を滞りなく実施することができました。シンポジウムのコーディネーターと司会を勤めて頂いた宮澤晴彦氏(北海道大学)、濱田武士氏(東京海洋大学)、上田克之氏(水産北海道協会)、ミニシンポジウムの企画・司会を担当して頂いた二平章氏(漁業情報サービスセンター)、高柳志朗氏(釧路水試)の各氏をはじめ、報告者、参加者及びご協力頂いた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。また、本大会は釧路水産協会との共催で実施され、釧路市、北海道新聞社、北海道漁業協同組合連合会の後援をいただきました。ここに記し、関係各位に改めて謝意を表します。

ミニシンポジウム (11/17) 会場：釧路市観光国際交流センター・大ホール

テーマ；道東経済へ影響を及ぼす主要水産資源の動向

コーディネーター：高柳志朗(釧路水試)・二平章(茨城大学)

趣旨説明：二平章(漁業情報サービスセンター)

《報告》

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. サケの資源動向 | 佐々木義隆(さけます内水試) |
| 2. サンマの資源動向 | 稲川亮(釧路水試) |
| 3. スケトウダラの資源動向 | 船本鉄一郎(北水研) |
| 4. イワシ・サバの資源動向 | 渡邊一功(JAFIC) |
| 5. ケガニの資源動向 | 志田修(釧路水試) |
| 6. その他主要資源の動向とまとめ | 高柳志朗(釧路水試) |

大会シンポジウム (11/17・午後) 会場：同上

テーマ；国際情勢下における道東漁業の現状と政策課題

コーディネーター：宮澤晴彦(北海道大学)、濱田武士(東京海洋大学)

上田克之(水産北海道協会)

主催者挨拶：北日本漁業経済学会会長、釧路水産協会会長

来賓挨拶：釧路市長

趣旨説明：宮澤晴彦(北海道大学)

《報告》

1. 道東漁業の概要と新たな資源利用 寺井 稔(北海道水産林務部技監)
2. 道東地域における沿岸漁業再構築の課題と展望 川崎一好(北海道漁業協同組合連合会会長)
3. サンマ資源管理をめぐる国際的動向とサンマ漁業の動向 大石浩平(全国さんま棒受網漁業協同組合専務)
4. ロシアのスケトウダラ生産体制と極東漁業の編成 原口聖二(北海道機船漁業協同組合連合会常務)

総合討論 司会；濱田武士(東京海洋大学)

＜懇親会＞ 会場；ピアホール「釧路霧のビール園」(参加者；約30名)

一般報告(11/18) 会場；釧路市観光国際交流センター・3階研修室

1. 漁協合併による産地市場統合の現状と今後の課題
一東安房漁業協同組合を事例に一 王莉莉(東京海洋大学大学院)
2. 韓国・釜山地区における底びき網漁業の現状と課題
板倉信明(水産大学校), Do-Hoon Kim(釜慶大学校)
3. ホタテガイ養殖業における共同作業の効果に関する研究
一八雲町漁協地区ホタテガイ養殖業を事例として一
本多秀成(北海道大学大学院・農学院)
4. 協働による流域環境の再生活動を巡る問題性と発展性 濱田武士(東京海洋大学)
5. 北海道の養鱒業の再考と発展性に関する一考察
大串伸吾(北海道大学農学研究院), 山下成治(北海道大学)
6. 学校給食における地場産物食材利用の課題 一八丈島産水産物の学校給食用食材への利用一
近藤信義(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究所)



総会・理事会報告

本大会における学会総会は近藤信義氏(東京学芸大学大学院)を議長に選出し、11月18日11時45分より、釧路市観光国際交流センター・3階研修室において開催されました。またこれに先立ち、11月16日には同所において理事会が開催されました。以下、主な協議内容、報告事項についてご報告致します。

(1) 新入会員承認

前回大会以降、新しく林薫平(福島大学経済経営学類)、杭田俊之(岩手大学)、藤井陽介(千葉県水産総合研究センター)、中塚俊太朗(北大院水)、孔麗(北海道教育大・函館校)、舟橋卓真(北大院水)、成田智之(大地みらい信金)、横山英信(岩手大学)各氏の入会が承認されました。

(2) 学会誌・短信発行について

昨年度発行の学会誌第43号は、シンポジウム報告の編集遅れなどにより、8月末発行の奥付からするとかなり発行が遅れてしまいましたが、このことについて編集委員よりお詫びの説明がありました。また、今年度は例年通りニュースレターを3回発行しましたが、このほかに春期研究集会の案内も全会員に送付したことが報告されました。なお、学会誌「北日本漁業」第44号を2016年8月末の奥付で発行し、ニュースレターは春期研究集会案内号を加えて、年4回発行する計画としました。

(3) 次年度大会開催地およびシンポジウムテーマの計画

次年度大会開催地・会場については福島県を第1候補にすることとし、開催地に相応しいシンポジウムテーマを今後シンポ担当理事（二平章、長谷川健二、山崎誠、上田克之、古林英一、濱田武士、三木奈都子の各氏）を中心に検討していくこととなりました。シンポテーマや現地協力体制に関する情報等につきましては、会員の皆様からも事務局ないしシンポ担当理事にご意見をお寄せ下さい。

(4) 決算・予算

2014年度決算（特別会計決算を含む）につきましては、田尾、山下両監事の監査報告を含め、原案通り承認されました。また、2015年度予算案についても原案通り承認されました。次頁に承認された決算書、予算書を掲載します。

(6) 春期研究集会について

今年度は東京で4月に会員多数の参加を得て春期研究集会を実施しました。次年度も東京で5月に春期研究集会を実施することとしております。開催日と会場は下記の通りです。会員外も含めて参加自由ですので、多数の参加を期待しております。

北日本漁業経済学会2015年度春期研究集会

開催日；2016年5月13日（金） 於；東京水産振興会

学会誌編集委員会からのお知らせ

(1) 掲載料の徴収について

学会誌第42号から一般投稿論文で掲載が決定したものについて、掲載料5,000円を徴収しております。掲載料は掲載が認められた後、速やかに学会費と同じ方法（郵便振替または銀行振込）で納入してください（振替口座、銀行口座の番号等は学会誌に記載）。

(2) 投稿原稿の送付先について

投稿規定に則り、昨年度と同様、学会誌への投稿原稿は学会事務局宛ではなく、下記編集委員会事務局宛お送り下さるようお願いいたします。シンポジウム報告者の方も原稿の提出を宜しくお願いいたします。

<投稿原稿送付先> *以前と宛先・メールアドレスが変わっておりますのでご注意ください！

759-6595 山口県下関市永田本町2-7-1 独立行政法人水産大学校

北日本漁業経済学会誌編集委員会宛 メールアドレス；kitanihon@fish-u.ac.jp

(3) 学会誌第44号の原稿提出期限について

次号学会誌第44号に投稿される方は、2016年2月末日を目途に上記宛、メールないし郵便で原稿（打ち出し原稿3部＋電子データ）をお送り下さい。なお、メールで投稿される方も、打ち出し原稿3部をメール投稿後速やかに郵送して下さい。また、添付して頂いた電子媒体につきましては、基本的にお返しできかねますのでご注意ください。

(4) 学会誌編集委員会開催予告

春期研究集会に合わせて、東京で学会誌編集委員会を開催する予定です。研究集会当日（5月13日の午前または午後）に実施できるかどうかまだわかりませんが、日時、会場等については改めてご連絡致します。

2014年度決算案

収支計算書 2014年10月1日～2015年9月30日

【収入の部】		
会費		476,000
個人	216,000	
団体	260,000	
会誌販売		18,000
毎日学術フォーラム	18,000	
雑収入		392
利子・利息	392	
繰入		164,517
府森大会特別会計	136,597	
春季集金	27,920	
仮払金戻り		49,243
当期収入計		708,152
前期繰越		3,543,573
計		4,251,725

【支出の部】

印刷費		675,216
会誌	623,376	
大会要旨集	51,840	
専務費		73,638
文具消耗品	510	
人件費	7,500	
郵送通信費	62,982	
振込手数料	216	
資料文献費	2,430	
春季集金特別会計		22,000
会誌費	22,000	
繰出		200,000
府森大会特別会計	200,000	
当期支出計		970,854
次期繰越		3,280,871
合計		4,251,725

2015年度予算案

【収入の部】

	2014年度決算	2015年度予算	増減	備考
会費収入	476,000	929,000	453,000	
個人	216,000	669,000	453,000	一般129名、学生8名
団体	260,000	260,000	0	17団体
会誌販売	18,000	18,000	0	
定期	18,000	15,000	△ 3,000	
臨時		3,000	3,000	
雑収入	214,142	300	△ 213,842	
利子・利息	392	300	△ 92	
特別会計繰入	136,597	0	△ 136,597	
その他	77,153	0	△ 77,153	
小計	708,142	947,300	239,158	
前期繰越金	3,543,573	3,280,871	△ 262,702	
合計	4,251,715	4,228,171	△ 23,544	

【支出の部】

印刷費	675,216	700,000	24,784	
会誌	623,376	640,000	16,624	第44号
大会要旨集	51,840	60,000	8,160	
専務費	95,638	120,000	24,362	
文具消耗品	510	10,000	9,490	
人件費	7,500	10,000	2,500	
郵送通信費	62,982	80,000	17,018	
その他	24,648	20,000	△ 4,648	
繰出	200,000	250,000	50,000	
大会特別会計	200,000	200,000	0	
春季集金特別会計		50,000	50,000	
小計	970,854	1,070,000	99,146	
次期繰越	3,280,871	3,158,171	△ 122,700	
合計	4,251,725	4,228,171	△ 23,554	

第44回北日本漁業経済学会印象記

山崎優輔（北海道大学大学院・農学院）

本学会には、昨年開催された青森大会に引き続き2度目の参加となる。簡単ではあるが、本大会のシンポジウム及び一般報告について簡単に感想と意見を述べる。

初日のシンポジウムは、沖合漁業の水揚と地域経済の関係性が深い拠点的漁業産地であり、日本を代表する産地である道東漁業の国際情勢下における現状と政策課題についてであった。自分は、故郷がオホーツクの小さな町であり、釧路へは週末に家族全員でドライブへ行くなど、決して遠い存在ではなかったのだが、道東漁業の情勢や課題等その実態についてはまるで知識がなく、勉強不足であったと痛感した。特に話題提供の中では、大石氏の「サンマ資源管理をめぐる国際的動向とサンマ漁業の動向」という報告がサンマをめぐるロシアとの関係性、そして東日本大震災の影響等について語られており、非常に印象に残っている。

二日目の一般報告では、濱田氏の「協働による流域環境の再生活動を巡る問題性と発展性」がとて印象的であるので、新参者で恐縮ではあるが若干の意見を述べたい。流域環境の保全は閉塞的な漁場環境である内水面漁業者にとっては死活問題となり、喫緊の課題である。報告では、4つの流域の事例から「協働」の問題性と発展性について触れており、非常に興味を惹いた。だが、それと同時に疑問が出てきた。水資源を利用する漁業者が流域保全へ取り組む理由は言うまでもないが、例えば上流域で生活をしている農業者や森林所有者等は何が引き金となり流域保全へ参加するのだろうか。当然、流域に住む一市民という立場で見れば、流域保全へ取り組むのは当然であるが、農業生産者としての視点からすると、利害がぶつかり合う関係においては協議の場すら設けられない場合がある。また、そうでなかった場合でも、流域において「協働」のためにパートナーシップを構築するのは、長い議論や情報交換が必要であり非常に手間がかかる。その実現には一体何が引き金となりうるかという関係性構築における具体的な論理については今回の報告では踏みこんでなかったので、今後の一つの課題となるのではないだろうか。

当然、濱田氏が述べたように、環境再生活動を捉えるには、利害関係を明確にする必要がある。しかし、自分はそのに加えて、このような問題に関わる各ステークホルダーの土地（漁場）利用や経営状況等に関する実態をもっと具体的に把握する必要があるのではないかと感じた。農業と漁業の関係で例を挙げると、各産業の地域特性や担い手の経済事情等といった、各産業の土台を踏まえて、漁民と農民視点で流域環境保全の評価をそれぞれ見ていくことで初めて流域保全における新たな関係性がどのように構築されていくかの論理が見えてくるのではないだろうか。

本大会、そして懇親会の中で多くの人とお話しする機会を得て、水産経営経済学を研究しているからといい、それだけしか見ず視野狭窄にならないように食欲にこれからも努力していこうと改めて感じた2日間であった。

第44回大会参加感想文

東京海洋大学大学院 王莉莉

今回、新規会員として初めて北日本漁業経済学会へ参加させて頂き、大変勉強になりました。研究者や水産部門の専門家の方々が最新情報を発表し、様々な問題に対する見解を丁寧に掘り込んで示してくれました。それらの内容は濃く、沢山の情報を得る機会になりました。また、パネルディスカッション部分の討論内容は、とても印象的で記憶に残りました。二日間のうちで幾つか印象に残った点を以下に述べます。

ミニシンポジウムでは、道東経済へ影響をおよぼす主要水産資源の動向に関し、サケ、サンマ、スケトウダラ、イワシ、サバ、ケガニなどの北海道の主要水産物を取り上げ、これらの資源状況と漁獲状態について報告されました。6つの報告によると、資源状況は大体安定しているものが多く、資源が回復していることが確認されました。ただ、今年水揚量が伸びず、厳しい状況となっているサンマについては、資源量が減少傾向となっているようです。しかし、サンマの市況は大きく上昇しており、水揚量が前年の58%に落ち込んだものの、金額は前年の98%に達してい

るとのことで、この点は大変印象的でした。漁業者にとって、サンマの生産環境は安定的であることが認識できました。

大会シンポジウムは、「国際情勢下における道東漁業の現状と政策課題」と題して行われ、沿岸漁業から国際的漁業へ展開してきた過去の歴史、その後の道東漁業に関する変遷と現況、また厳しい局面に立つ道東漁業の今後の課題等を理解してきました。200海里体制成立以前はサケ・マスを中心に漁業生産を行っていたが、ロシア海域等での規制強化により、イワシ・サバを主な対象としたまき網漁業生産がメインとなり、それらの資源が1990年代に減少傾向になると、サンマが台頭するかたちで地域漁業が維持されてきました。しかしそうした中で漁業者の人数がだんだん右肩下がりとなっていることにより、道東地区の漁業は徐々に厳しい状況になってきています。

こういう状況を踏まえ、道東漁業の将来が懸念されています。それについて川崎氏の報告では、陸上養殖事業等にも目を向けて、沿岸漁業振興を対策の柱として検討すべきと述べられていました。沖合・遠洋漁業のかつての栄光にしがみつくとではなく、足下にしっかり目を向けるべきとの主張は、地元の方の発言であるだけに重みがあると感じました。

一般報告では、私自身「漁協合併による産地市場統合の現状と今後の課題」について報告させていただきました。報告後、多くの方々からコメントをいただき、とても参考になりました。また、他の5つの報告から、各地域の漁業の現状と課題を学ぶことができ、日本漁業全般の理解が深まるように感じました。

本大会の報告や議論の内容を拝聴することができたことを嬉しく思うとともに、大会の設営に携わって下さった多くの方々には厚く御礼申し上げます。私にとって報告者の方々の研究方法・問題意識から多くのことを学ぶことができ、今後の研究を進めていく方向性等を見つけることができました。今後も学会には積極的に参加させて頂きたいと思っております。皆様、よろしくお願い申し上げます。

北日本漁業経済学会事務局（事務局長；宮澤晴彦）
〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目
北海道大学大学院農学院 水産経営経済学分野
TEL 011-706-4139 FAX 011-706-3640
〒041-8611 函館市港町3-1-1
北海道大学水産学部 海洋社会科学分野
TEL 0138-40-8834 FAX 0138-40-8835
E-mail miyazawa@fish.hokudai.ac.jp

* 来年度までは札幌の研究室が存続しますが、再来年度からは函館の研究室のみとなります。